

在宅障がい者(児)宅の安心療養環境 を創出する病-宅連携型高度ICT総合 ケアシステムの研究開発

研究代表者:

中村昭則(信州大学病院 難病診療センター)

研究分担者:

滝沢正臣(信州大学病院 総合遠隔診療室)

宮崎大吾(信州大学病院 難病診療センター)

SCOPEプロジェクトで行う研究開発内容

在宅療養・ケアの課題

1. 介護の身体的・精神的負担が増大
2. 在宅療養の支援体制の不足
3. 支援者間で病状やケアが把握できていない
4. 専門医とのコミュニケーションの不足

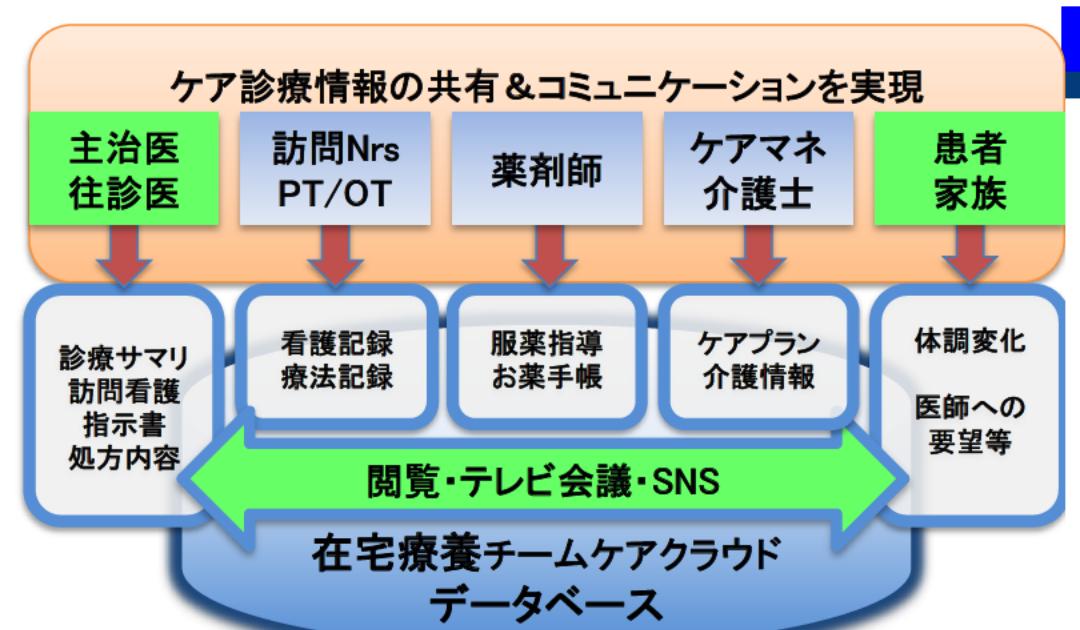
本プロジェクトの開発項目

1. 患者家族と多職種間の情報共有
2. テレモニタリング（バイタルモニター、人工呼吸器）
3. テレコミュニケーション

以上を統合したICT総合ケアシステムの開発を行う

患者家族と多職種の情報共有:チームケアクラウド

- 自宅を安心・安全・快適な病室へをコンセプトに開発
 - 多職種の患者情報をクラウドサーバで安全、効率的に共有
 - 患者家族も含めたチーム内のコミュニケーションを実現
 - バイタルサインの遠隔モニタリングなどによる見守り



現在、長野県を中心に46チームで利活用

総務省SCOPE2013-14によりシステムを開発

ケア記録(訪問看護)の入力画面

体重	<input type="text"/>	休温	<input type="text"/>
体重測定	<input type="button" value="実行"/>		
開始	<input type="text"/>	肺田	<input type="text"/>
不整脈	<input type="text"/>	血圧(上)	<input type="text"/>
血圧(上)	<input type="text"/> 130	血圧(下)	<input type="text"/>
血圧(下)	<input type="text"/> 80	SpO2	<input type="text"/>
SpO2	<input type="text"/> 96	呼吸状態	<input type="text"/>
呼吸状態	<input type="text"/>	呼吸困難	<input type="text"/>
呼吸困難	<input type="text"/>	--	
右肺	<input type="checkbox"/>	入力エリア	
左肺	<input type="checkbox"/>	・バイタル	
右肺音	<input type="button" value="実行"/>		
左肺音	<input type="button" value="実行"/>		
左肺	<input type="checkbox"/>	・一般状態	
左肺音	<input type="checkbox"/>	・実施内容	
左肺音	<input type="checkbox"/>	・連絡事項	
左肺音	<input type="checkbox"/>	・写真動画	
エアーエー	<input type="text"/> 良い	入力ナビ	
実施内容	<input type="button" value="実行"/>		
部位写真	<input type="button" value="実行"/>		
連絡事項	<input type="button" value="実行"/>		

ケア記録(訪問看護)の参照画面

多職種間の コミュニケーション

コミュニケーション画面(SNS)

ましている。ちゃんと用事があった。結果、
申していましたよ。

2015/06/10 08:31

悔しいのですが、痛みがなくなり一安心で
す。



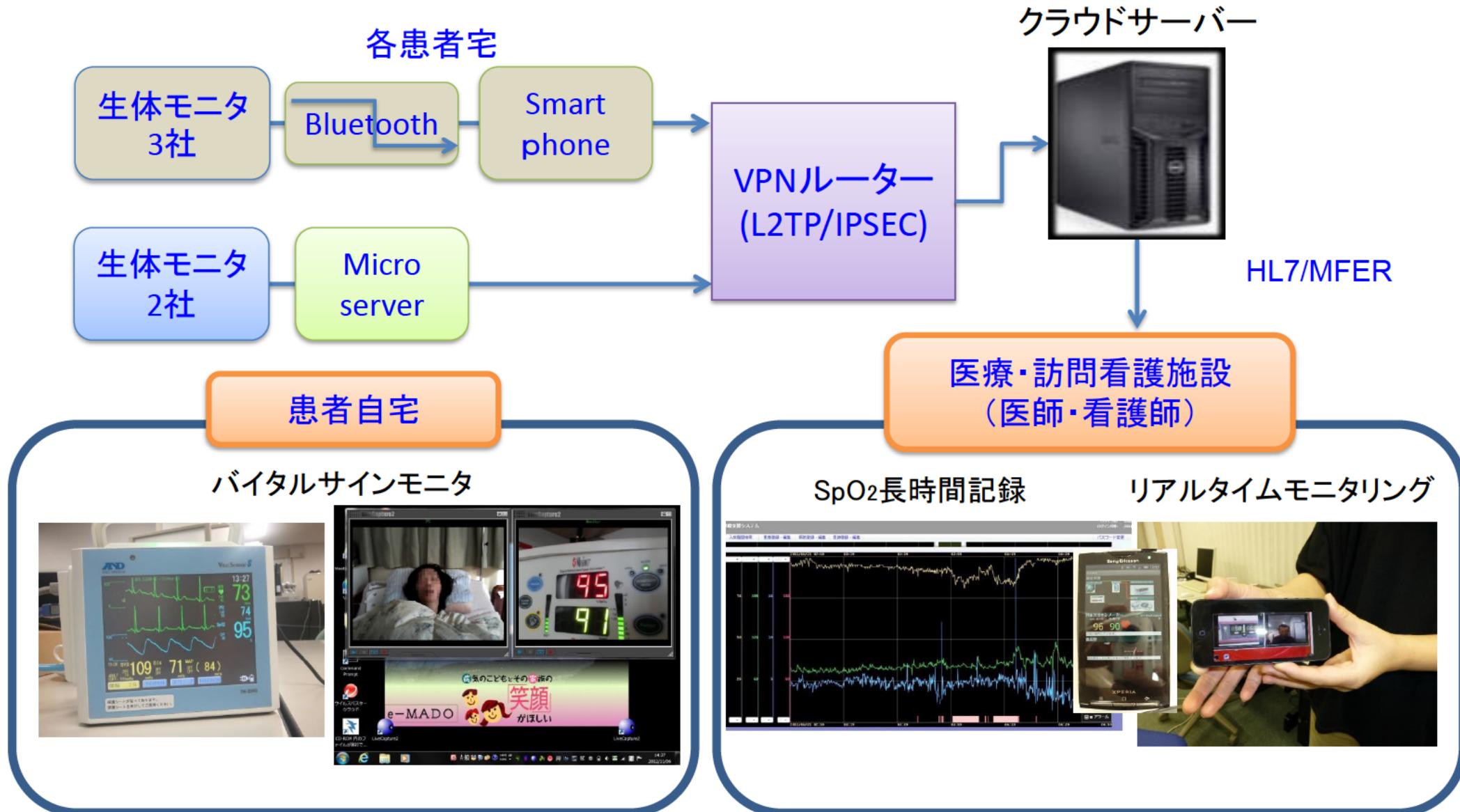
テーマ毎のスレッド
参加者をセレクト

療養者家族と チームスタッフとの コミュニケーション

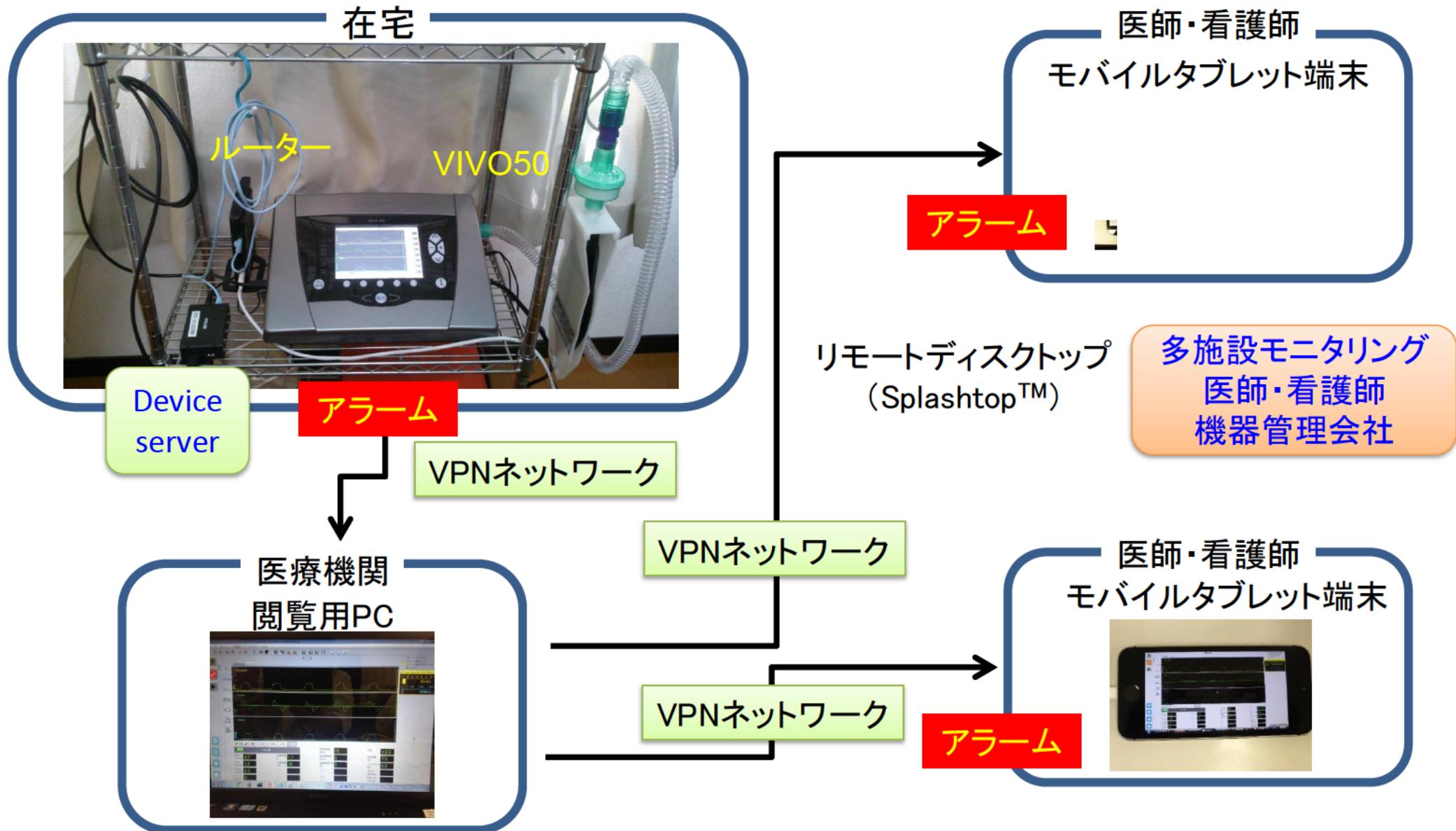
015/06/10 08:33

2015-08-11 09:42

バイタルサインのテレモニタリングの開発

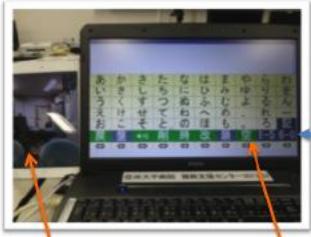


人工呼吸器遠隔監視・アラーム通報



テレコミュニケーションの開発

患者用画面「伝の心」



医師の映像

伝の心画面-PC)



家族用画面

FaceTime

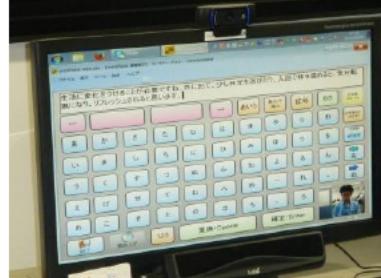
病院側

伝の心画面-iPad

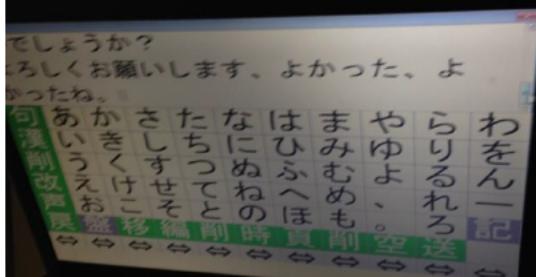


患者/家族
画面

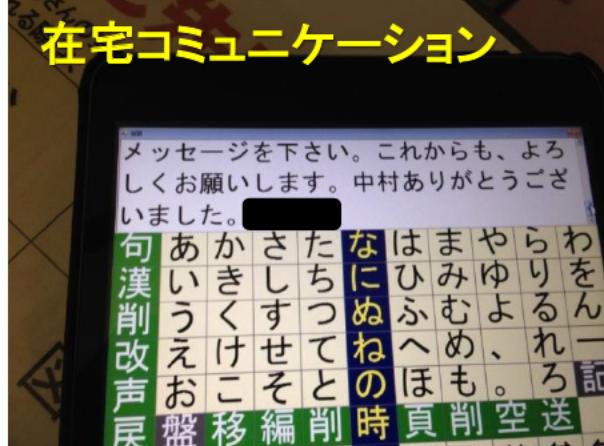
視線入力装置を用いた実証実験の様子



患者さんのPC「伝の心」画面



在宅コミュニケーション



日時: 2014年11月5日 10:42:41 JST
今は、妹とメールをやっています。言いたい
事が、伝えられるのでとても嬉しいです。

研究開発成果の展開及び波及効果創出の取り組み

- 本研究で開発したシステムは、在宅療養の課題に対し即時的な効果が期待でき、社会への影響、波及効果は非常に高いと考えている。
- システムの普及のために、学会・研究会などの発表や医療・福祉行政が行う市民公開講座などの広報を行っている。
- 運用維持にかかる経費については、課金の仕組みづくりの検討や地域包括ケアを担う行政に対する働きかけが必要である。